
■ こなな二人 ■

理緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

■ 小さな二人 ■

【Nコード】

N 8 9 4 9 B

【作者名】

理緒

【あらすじ】

京極夏彦：作／百鬼夜行シリーズ（別名「妖怪シリーズ」）より、薔薇十字探偵社を中心とした二次小説です。BL的な要素あり。というよりそれしかありません。短編連作全45話の予定。榎さんと益田君でBL要素を加えた薔薇十字探偵社の日常を、その他キャラの視点も交えながらまったり連載中 益田君がややアイドル状態です。

会いたかったから (前書き)

短編連作(全45話の予定) 第1話目。

> 和寅 / 益田 <

会いたかったから

お前は何故探偵になったのだ？と誰かに聞かれたならば、益田龍一は迷いなくこう答える。

『ただ彼の傍にいたかったから』

彼、というのはもちろんこの薔薇十字探偵社の最高責任者にして世界唯一の探偵、榎木津礼二郎のことである。

益田は元々探偵に憧れていたわけではない。ましてや榎木津のような男になりたいと思っただけでも決してない。性に合わないと感じていた前職だって無能だったわけではなく、そのまま続けようと思えばそつなく勤め上げる自信はあった。

ただ、そういう生き方は社会の枠組みに予め組み込まれ、世間の尺度によって調えられた凡庸な人生であり、それは益田の持つ彼自身の輝きを鈍らせるものでしかなかったのだ。

ここにいる自分は本来の自分ではないと、そう気付いたのは彼に出会ったからであった。

奇矯極まりない彼の個性は強烈な光を放ち、その輝きは益田の存在など塵すら残さないほど焼き尽くすかのよう to 思われた。

しかし存外にしぶとく出来ていたのか、益田はその存在をかき消されることもなく、彼の輝きを一身に受け

止めていた。

ただその輝きに惹かれた。光は鮮烈だった。身を焦がされる思いの中、それでも益田はその輝きをもっと感じていたかった。

隣りにあるだけで自分も共に輝いていられるかもしれないと、そう勘違いしたのかもしれない。

とにかく、ソレは益田の人生にとって欠かせないモノとなったのだ。

ソレ無しでは生きていけない。

榎木津の傍にいないければ、自分は生きている実感が湧かない。生きていく意味もない。

今まで築きあげてきたものを全てを投げ捨て、警察を辞すことに不思議と躊躇いは覚えなかった。

ただ、傍にすることを許されなかったらどうしようかと、薔薇十字探偵社の摺りガラスの向こう側で、

不安に押しつぶされそうになっていたことだけは今でもはっきりと思い出せる。

そして結果として、益田は拒まれなかった。だから今、こうしてココに存在するのである。

「ところで益田君。君は何故ココにいるんだったかな？」
「・・・・・・・・・・は？」

ズズズ・・・・と行儀の悪い音を立ててお茶を啜りながら唐突に問いかける寅吉に、

益田は手元の書類にぼんやりと走らせていた視線を斜め前に向けた。

寅吉は来客用のソファにふんぞり返るように腰掛け、
何だか尊大な態度で益田の仕事振りを見ていた。

相変わらず主の姿が見えない時の彼はとっても偉そうな姿である。

そして当然のように益田用のお茶は用意されていない。
飲みたければ自分で淹れろという無言の圧力を感じる。

「何も好き好んでココに来なくても良からうに」
「はぁ・・・・・・・・」

寅吉は益田が探偵に弟子入りした経緯を知っている。
今更何を聞くのだと、益田は怪訝そうに眉を顰めた。

するとその反応が意外だとも言うように、
寅吉は二、三度パチパチと瞬きをして身を乗り出してきた。

それに呼応するように益田は僅かに上体を反らす。
普段表情の変化に乏しい寅吉だが、

野次馬根性丸出しの時には今のように好奇心に目を輝かすことがある。

妙に愛嬌のようなものを感じてしまうのでそんな瞳で見つめないで
ほしいと、

益田は内心でちよつぴり焦った。

寅吉に対して『ちよつと可愛いかも』なんて感情をうっかりと抱いてしまうのは、

益田としては勘弁してほしいところだった。

「急ぎの仕事には見えないが、何かまた新しい依頼でも引き受けたのかね？」

「は・・・あ？」

頼むから、犬つころのようにキラキラとした瞳で見つめないで欲しい。

そういうのは、歳のわりに稚氣に溢れている彼の雇い主だけで充分なのだ。

（まあ、あの人は犬というより猫の眼差しだけど）

「和寅さんって本当・・・」

下世話な話が好きだなあという言葉は飲み込んで、益田は深いため息をついた。

だって仕方ないじゃないか、

と寅吉は厚ぼつたい唇をツンと突き出して再びソファにふんぞり返る。

「最近世の中平和すぎて私あ退屈なんだ。

たまには君が普段突付き回している下世話で低俗な仕事の話でも聞いてやろうという気にだつてなるさ」

「下世話で低俗は余計です。

そんな仕事でも引き受けなきゃ和寅さんのお給金だつて

この先支払っていけるかわからないってのに」

そんなことまで君に心配してもらう必要はないよ、
と寅吉は冷めた口調で益田を睥睨した。

「大体この事務所に住み込みで働いてて、
平和で退屈だなんて大それたことが言えるのは和寅さんくらいなも
んですよ」

僕あ毎度毎度あのおじさんの我俣に散々付き合わされて、
心身共にくたくただというのに。と益田は中断していた作業を再開
するため、
手元の書類に目を落としながら口先だけで答えた。

「だったらたまの休暇くらい家でゆっくり休みたまえよ。
何でわざわざ日曜だというのにココに来るんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

ようやく寅吉の・・・先般からの質問の意味が理解できた。
理解はできたが、ハテ・・・？と益田は首を捻る。

「いけませんでしたか？」

「いけなくはないが、急ぎの仕事でもないだろうに」

確かに。週に一度の休日は貴重だ。

刑事時代などは非番の日を楽しみに仕事に励んでいたし、
休日は家でごろごろしているだけの日も多かった。

しかしこの探偵事務所に勤め始めてからは休日なんて有って無き

が如しだし、

日曜といえども書類整理やらなにやら・・・

結構何かと仕事をしに事務所へ顔を出していたように思う。

何より、下宿に戻らない日だって多いのだ。

益田は自分がそんなに仕事好きの人間だとは思わなかったので、改めて己の勤務体制を鑑みて驚いた。

今日だって、何も考えずにいつも通り出勤してきたのだ。

「・・・ま、今日はウチの先生も朝から出かけて留守だし、君もゆっくり仕事ができるだろう。」

私はこれ以上邪魔はしないから、まあ適当にやってくれ」

寅吉は空になった湯呑みを漆盆に載せると、

サテ、と一声あげて大きく伸びをしながら立ち上がった。

「あの、和寅さん」

「ん？」

「榎木津さんは今日はいらっしやらないんですか？」

まだ、部屋で寝ているのかと思っていた。

どうりで朝から静か過ぎるわけだ。

「ああ、だから鬼のいぬ間に・・・ってヤツさあね。さあ、洗濯洗濯っ！」

あゝ忙しい忙しい！と、

寅吉は大げさに言いながらお盆を持って台所へと引っ込んでしまった。

鬼のいぬ間に洗濯。

なるほど、榎木津の不在は寅吉にとって命の洗濯でもあるのだろう。普通ならそうだ。あんな傍若無人な雇い主の下で働くのだから、四六時中顔を合わせているのは疲れる。

たまに留守の間くらい、羽を伸ばしたくもなるだろう。しかし・・・。

（なぐんか白けちゃったなあ）

榎木津が不在だと聞いた途端に、益田は何だか腑抜けてしまった。

「帰ろっかな・・・」

まだほとんど白紙に近い状態の調査報告書を前に、益田はぽつりと呟いた。

先日引き受けた依頼についての報告書だ。

今日はこれを片付けるつもりでいた。

調査は完了しているが、依頼人への報告は三日後の予定だ。

つまり、何も今日中に片付けてしまわなければいけない仕事ではないのだ。

本当に、休日だというのに何故わざわざ出勤などしてしまったのだろうか？

益田は何だか釈然としないまま、とりあえず持ってきた鞆に書類を詰め込む。

何だか、色々なことが馬鹿らしく思えてしまった。

（榎木津さん、いつ戻ってくるのかな？）

来たばかりで帰るというのも癪なので、
しばらく妄想でもして時間を潰そうと思った益田は窓の外に目をや
った。

窓の外は抜けるような青空で、神の帰還はまだまだ遠そうな気配
だった。

（まったく・・・何てわかりやすい男だろうな）

窓の外なんか眺めながら気だるげにため息をついている益田の様
子を

台所に通じる扉の陰からコッソリと窺いながら、
寅吉は心底呆れたように深く息を吐き出した。

（あれで当人は全く気付いてないんだから、鈍いにも程がある）

益田は探偵の押しかけ弟子だ。依頼下僕である。

彼が何やら胸に決意めいた思いを抱いてこの事務所の扉を開いた日
のことを、

寅吉ははつきりと覚えている。

ああ、この男も先生の毒気にあてられた可哀想な被害者なんだな・
・

と寅吉は無感動にその様子を眺めていた。

昔から、似たような光景はたびたび目にしてきた。

榎木津は何せ目立つ御仁だから、女と言わず男と言わず多くの人々が彼に惹かれてフラフラとやってきた。

しかし、益田のように約束された人生を棒に振ってまでも押し付けてきた思い切った人物は見たことがない。

だから寅吉は、そんな馬鹿げているとしか思えない愚行をあっさりとやってのけてしまったお馬鹿な人物に、ちよつと興味をひかれたのだ。

意外だったのは、榎木津がそんな彼をキツパリと拒まなかったこと。

いつもの彼らしくない。

下世話な話が大好きな寅吉は、他人の色恋沙汰を眺めるのも大好きだ。

今までにも身近な人たちのそういう姿を、結構目にしてきた。だからこれだけは間違いなくハッキリ言いきれる。

益田は榎木津に懸想している。

それはもう、絶対に間違いのない事実だ。

何せ榎木津に会いたいがために、休日だというのにわざわざ事務所に顔を出すほどののだ。

驚くべきは、それを本人が全く自覚していないということだ。

（ああ全く、憎たらしい）

榎木津が不在だと聞いただけで、早速帰り支度を始めてしまう益田に、

寅吉は呆れを通り越して齒がゆささえ感じてしまうのだ。

何故自分の正直な気持ちに気付かない？

傍で見ているもあれだけわかりやすいというのに！

益田なんてさつさと榎木津に振られてこの事務所から追い出されてしまえばいいのに！

と、そう思う反面、

そうはならないことを心の片隅で僅かに望んでもいる自らの感情を自覚している寅吉は、

益田のあまりもの鈍感さに時々腹立たしくなるのだ。

どうでもいいから白黒はつきりつけてほしい。

益田が振られるなら振られるで別に構わない。

それはそれでスッキリするし、煩わしいこともなくなる。

思いが成就するなら成就するで、やっぱり一向に構わないと思う。

あの榎木津が簡単に陥落するとは思えないが、

そうなったらそうなたで実に面白そうだ。

どうせ二人に振り回されて苦労するのは目に見えているが、

どっちに転ぼうと寅吉からすれば大した違いはない。

彼はあくまでも部外者なのだ。

だからさつさと己の思いを自覚して、取り入るなり奪うなり、何らかの行動を起こしてほしいのだ。

平和で退屈なつまらない日常に、刺激を与えてほしい。

（あゝあ、あんな幸せそうな顔しちゃって・・・）

一体何を妄想しているのやら・・・。

片方の手で頬杖をつきながらほわ〜んと緩みきった顔で窓の外の青空を眺めている姿を見ると、

思わずその尻を力いっぱい蹴っ飛ばしたくなってしまう。

脳がウキウキと散歩にでも出かけているようなおめでたいその様子を見ていると、

本当はあと小一時間もすれば榎木津が戻ってくる予定になっているなどと、

寅吉は死んでも言っただけやるものかと思ってしまうのだ。

それでも・・・。

「益田君。仕事しないのならたまには洗濯ぐらい手伝ってくれたまえよ」

できるだけ感情が表に表れないようそう言っただけで、

妄想に耽っていた益田は突然のことに面食らったように目を丸くして振り返った。

（結局、私も甘いな・・・）

思うに寅吉は、一途で鈍感でそれでいて一生懸命な益田のことが、意外に気に入っているのかもしれない。

きつと洗濯物を全て干し終える前に、主は戻ってくるだろう。

そして益田は今よりもっと幸せそうな笑顔で、彼の人の傍らに佇むのだ。

遠からず訪れるはずのその時を想像して、やはり寅吉はうんざりしたように深いため息を漏らしてしまうのだった。

>>完<<

えゝ・・・まあ、こんな感じで。

この先ゆるやかに展開していくと思われませんが、温かい目で見守ってやってください。

ウチの和寅はどうしようもなくお馬鹿な益田君のことを弟のように可愛く思っています。

でも素直に「可愛い」と思うことを理性が許さないらしいです。ちなみに榎さんのことも「大きな弟」のように感じてるっぽいです。

会いたかったから（後書き）

他にも二次小説、同人系イラストあります。

「ワンピース」「蟲師」「京極夏彦」

気になる方はPCサイトへお越し下さい。

<http://kdokusyo.hp.infoseek.co.jp/>

石地藏からの忠告（前書き）

短編連作（全45話の予定）第2話目。

> 中禅寺／関口／益田 <

石地藏からの忠告

『あれと付き合つと、それは恐ろしい勢いで馬鹿になる』

と、本島はこの目の前の古書肆にどうやら再三忠告されたい。

益田は猫のように背中を丸めて炬燵に両手を突っ込みながら、親の仇でも目の前にしているような不機嫌そうな顔で本を読む中禅寺の姿をぼんやりと盗み見ていた。

「今日は随分大人しいじゃないかい、益田君」

向かい側から不明瞭なくぐもった声でぼそぼそと語りかける関口に、

益田は「はあ」と気のない返事を返す。

「今頃は例の靈感探偵とかいう輩が、三文芝居にもなりやしない茶番劇を始めている頃じゃないのかい？今朝、青木君から連絡があつたんだが」

君は行かなくて良かったのか？

と、中禅寺は本から視線を外すことなく問いかけた。それにも益田はただ「ええ、まあ・・・」と気だるげに答える。

「靈感探偵って何だい？」

事情を知らない関口は、胡乱げな瞳を中禅寺に向けた。

「関西からわざわざお越しになった神無月某とかいう名探偵殿が、
よりにもよって榎木津に喧嘩売ったらしいぜ？
今日、探偵勝負をするんだと」

「へー？そりや命知らずな」

興味が湧いたのか、関口はべしよつとつぶれていた上体を僅かに
立て直して
うつすらと笑みを浮かべた。

「だけど榎さんがそんな勝負を引き受けるかな？
馬鹿馬鹿しいからって相手にしないんじゃないかい？」

「受けるさ。あの男はそういうお祭り騒ぎには目がないんだ。
例え親が危篤だろうと実家が火事だろうと、
喜び勇んで勝負の場に入り込んで行くに決まってる」

親は・・・危篤なのだ、本当に。

榎木津は今、実家に帰っている。

青木から事務所の方にも問い合わせがあったので、
益田は彼にもそのように伝えた。

しかし、中禅寺の読みは当たっているだろう。
親が危篤だからと言って、榎木津がこんな面白そうな話を黙って見
過ごすはずがない。

「だったら益々ここで油売ってる場合じゃなかるうに。
君のご主人様の一大事じゃないか」

再び水を向けてくる関口に、

益田は「うゝん」とはつきりしない唸り声をあげた。

「何だい。君、今日は本当におかしいぞ？具合でも悪いのかい？」

具合・・・は、大層悪いのだ。

ここ数日急に寒くなったせいで、益田はすっかり体調を崩していた。
た。

それでも昨日まではまだマシで、普通に仕事をこなしていたのだが。

それが今朝目覚めてみたら関節は痛むは酷い悪寒に襲われるは
目はかすむは頭がぼんやりとして思考が散漫になるは・・・。

「・・・益田君？益田君！」

目の前で掌をヒラヒラと揺らされ、

益田は大儀そうにのっそりと顔を上げた。

あの関口に心配されちゃっている。

その事実になんだかよくわからない衝撃を受け、

益田は再びがつくりと俯いた。

「何を落ち込んでいるのか知らないが、
君は一体何の用事でウチに来たんだね？」

横合いから中禅寺が不機嫌そうに声をかける。

ああそつだ聞きたいことがあつたのだ、と益田は用事を思い出したが、

先刻からどんどん悪化する体調に、今は口をきくのさえ億劫だった。

「京極堂に何か相談でもあるんじゃないのかい？」

邪魔なら僕はこれで退散するよ、と関口は水を向ける。

まあ別に聞かれて困るようなことでもなく、相談というほど大した用でもないのだが。

「何が退散するよ、だ。原稿取りから逃げてきた男がよく言うぜ。

君こそココを駆け込み寺代わりに利用するのはやめてくれないかな？

ココに置いてある本はどれもこれも貴重な文献ばかりだ。

いつもじめじめうじうじしている君のせいだ

これらの貴重本が湿気でキノコでも生やしたらどうしてくれる？」

ちよつとそれは酷すぎるんじゃないかというような中禅寺の理不尽な言葉に、

関口は「キノコが生えたのは学生時代の話じゃないか」とか何とか、口の中でもごもごと言いつつ訳のようなことを呟いている。

ちよつと待て、何だその面白そうな話は？

と問い質したくなるような内容だが、

益田は正直二人の会話をただ聞いているだけでもうしんどくて、へろへろと脱力するように炬燵に突っ伏した。

「それにしても榎さんは相変わらず用もなくココに入り浸ってるんだらう？」

たまにはヤツのことも追いついたらどうなんだい」

「目的もなくただ凡庸と訪れる知人の君ならともかく、遊びに来た友人を追いつ返す理由もないだろう。」

大体あの男は僕に帰れと言われてはいそひですかと素直に従うような奴じゃないぜ？

僕が日頃どれだけ苦労してると思うんだ。

こちらがどんなに忙しくしていようと取り込み中だから帰れと言っても、

あいつは自分が来たい時に来ていただけにいるし、帰ると決めたなら挨拶もそこそこにあっさり帰ってしまう。

『顔を見に来てやったただけだ！』とか言いながら

本当に僕の顔を見ただけで来るなり帰ってしまったこともあるくらいだぞ。

そんな男を追いつ返すなんてことが出来るなどと、君は本気で考えているのか？」

「あ……う……」

相変わらず中禅寺は口数が多い。

しかも言っていることは正論なので、

関口は途中で口を挟むことも反論することもできずに固まっていた。

「しかしここ数日、榎木津の姿を見ていないなあ。

まあどうせ、今日あたり探偵勝負の後にでもついでとばかりにここに現れるんだろうがね。」

あいつは何か愉快なことがあると上機嫌で乗り込んで来るからなあ」

中禅寺はチラリと入り口の襖に視線を走らせた。

いつも騒々しく登場する探偵のせいで、
最近何だか建て付けが悪くなっているのだ。

「そういえば僕がこの前榎さんに会った時、何だか変なこと言ってたなあ。」

『エチオピア人がコメクイタイと言うから
今夜はヤツに米を腹いっぱい食わせてやるのだ！

神の施しだ！慈善事業だ！』とかなんとか。
外国からのお客様でも来てたのかな？」

「エチオピア人ねえ……」

そこで中禅寺は炬燵に突っ伏している益田の方を溜め息混じりに見遣った。

「まあ、榎さんがわけのわからないことを言うのは
今に始まったことじゃないけどさ……」

関口も、中禅寺につられるように益田の姿を目に留めて口を噤んだ。

「……」

「……」

ただでさえ凶悪な顔なのに更に不機嫌そうに眉を顰める中禅寺に、
関口も困ったように眉根を寄せる。

「……寝ちゃったみたいだね、益田君」

「……全く、こういうところばかりあの男に似てきて迷惑極まり

ないな」

「そう言つなよ。可哀想じゃないか、具合が悪いんだろつに……」

関口なんかに可哀想だと同情されたなんて知つたら、

益田は泣き崩れながら我と我が身を呪つだろつ。

関口は「ちよつと失礼」と誰にともなく断りを入れ、

身を乗り出して向かい側で突つ伏している益田の長い前髪をかき分けながら、

その額に触れてみた。

「……………やつぱり。結構熱あるよ、京極堂？」

「それはそうだろう。いかにも高熱です、というような顔色だったし」

「何もこんな状態で無理して出歩かなくても良いだろうに。

君に余程大事な用でもあつたんだろつかねえ？」

「大事な用ねえ……。それより、

高熱が出ていることに本人は気付いてなかったという方がありそうだが」

実は益田の体調が思わしくないことなど、二人はとつとくに気がついていて。

何せここに現れた時から彼は顔を真っ赤にしている、

挨拶もそこそこに外套を脱ぐなり炬燵にまっしぐらだったのだ。

加えていつもは滑らかに動く調子の良い口が、

今日は錆付いてでもいるように鈍かった。
勘繰るまでもなく、明らかに具合が悪そうだった。

だから中禅寺などは、面倒なことになる前に早く帰ってくれないかなあ・・・
などと薄情なことを思っていたのだ。

「確かに。本人は気付いてなさそうな感じだったね」

関口はぐつたりと目を閉じている益田の寝顔を至近距離で見下ろしながら、

口元にそつと慈しむような笑みを浮かべた。

「鈍いからなあ益田君は。色んな意味で」

そんなことを小声で呟く関口に、中禅寺は僅かに目を見張る。

関口という男は昔から愚鈍ではあるが、人間を観察する目は意外に鋭いのだ。

「とにかく、このままじゃ余計に悪化するよ。京極堂・・・」

「・・・仕方ないな。奥の間に寝かせよう。」

僕は布団を敷いて来るから、彼を運ぶのは君に任せたま、関口君」

力仕事はしない主義の中禅寺だが、

ここにきてようやく重い腰をあげることにしたらしい。

彼は手にしていた本を閉じて脇に片付けると、渋々と立ち上がった。

『あれと付き合つと、それは恐ろしい勢いで馬鹿になる』

と、本島はこの目の前の古書肆にどうやら再三忠告されたい。
益田はそれが不思議だったのだ。

忠告の内容に対する疑問ではない。

再三に渡つて忠告した、というその事実こそに疑問を感じたのだ。

『何が疑問だね。何も不思議なことではあるまい』

ああ、この男なら確かにそう言うだろうな、

と益田はぼんやりする頭で目の前の骸骨のような顔を見上げた。
薄闇に佇むその姿は、どう見てもやっぱり死神にしか見えない。

(よく出来た夢だなあ・・・)

知らない部屋に横たわっている自分の傍らに、慟然と佇む死神。
しかもこの死神は、どうやら自分のとりとめもない疑問に
答えてくれる氣でいるらしい。

『だって中禅寺さんは、僕にはそんな忠告しなかったじゃないです
か』

似たようなことなら言われたこともある気がするが、
そう何度も忠告されたような覚えはない。

『しなかったんじゃなくて、出来なかったんだよ。大体そんな忠告をする間も無かったからな。』

君がまさか警察やめてあいつのところに転がり込むなんて、予想もしてなかったし。それに・・・』

中禅寺は横たわる益田の枕元にかがみ込むと、骨ばった手をそつと伸ばして彼の頬に優しく触れる。

『君は最初から馬鹿なんだから良いじゃないか。これ以上馬鹿になりようが無い』

酷いこと言うなあと思つたが、頬に触れてくる手が優しくて気持ちよかつたからまあいいやと目を閉じた。

すぐに、その唇から静かな寝息が漏れ出す。

「馬鹿な子ほど可愛いとは言つけれど・・・」

こつというのは反則だ、と中禅寺は口の中で呟いた言葉を飲み込んだ。

結局床を延べ、関口一人では無理そうだったので中禅寺も益田を運ぶのを手伝った。顔に似合わず面倒見の良い男である。

一仕事を終えた後、そろそろ家に帰るよと言つ関口を珍しく玄関先まで見送った。

『益田君にお大事につて伝えておいてくれよ。それから・・・』

上着の釦を留めながら滅多にないことに、

関口は何だか楽しそうな顔でいたずらっ子のように笑った。

『この先も榎さんと真剣にお付き合いするつもりなら、
もつと体力つけた方がよいよ、って』

榎さんもあれで結構心配性だから、あんまり心配かけるのも良くないからね、

と関口は中禅寺でさえ思わずドキリとするような鋭い忠告を残して帰って行った。

（関口でさえ気付いているのか・・・）

なのに肝心の本人が全く気付いていないというのはどういうことだろう。

どんだけ鈍いんだ！と思わず呆れを通り越して憤りすら感じる。

「君は神に惚れるという、人類最大の禁忌を犯したんだぜ？

そんな大胆なことをしたからには何としても勝利を勝ち取っても
らわなきゃ、

僕らの立つ瀬が無いじゃないか」

衝動に任せて寝ている男の鼻をぎゅむっと摘むと、
くぷつと変な音を立てて口が開いた。

「なんて間抜けな顔だい」

むぐぐ・・・と息苦しそうに顔を顰める益田を見下ろして、

なぜ益田君は自分の気持ちを自覚しないのでしょうか？
焦らし作戦でしょうか？私に対しての（笑）

石地蔵からの忠告（後書き）

他にも二次小説、同人系イラストあります。

「ワンピース」「蟲師」「京極夏彦」

気になる方はPCサイトへお越し下さい。

<http://kdokusyo.hp.infoseek.co.jp/>

嘘っ?！
(前書き)

短編連作(全45話の予定) 第3話目。
> 中禅寺/榎木津 <

嘘っ?!

「そんなこと僕に言っ たって仕方がないだろう、榎さん」

僕だっ て迷惑してるんだ、

と呟いてみたところで目の前の傍若無人は意に介さない風に

「だっ てずるいぞ、お前ばっ かり!」

と子供のようにぶっ と頬を膨らませて抗議した。

「何がずるいものか。いちいち面倒見させられるこちらの身にもなっ てくれ。」

大体彼がことあるごとにウチを訪れるのは、

普段のあんたの扱いの方に問題があるんじゃないのか?

それが嫌なら逃げられないように縛り付けておくか、

そうじゃないのならもう少し労わっ てやればいいだろう」

「労わる? 下僕を?・・・この僕が?」

榎木津は理解できない外国の言葉を突然聞かされたとてもいうように、

大きな目を益々見開いて中禅寺を凝視する。

「ただの下僕じゃあないのだろうに」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

含みを持たせるような言い方に、

榎木津は「ふんっ」と鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

今日は朝から探偵合戦などというくだらない行事に参加させられて、

榎木津は現在ご機嫌斜めなのである。

今朝青木から実家の方に連絡をもらった時には何やら楽しそうだと感じたのだが、
実際現場を訪れるとこれが実にくだらなかった。

怪しいゴロツキ共はてんで弱くてお話にならなかったし、
榎木津に喧嘩を売ってきたという靈感探偵は全く靈感など無さそうだったし、
おまけに変態だ。いや、変態ではなく変装男だったか。

とにかく、榎木津は久々に暴れられると思って意気揚々と現場に赴いたのに、
充分に発散させることもできずに不完全燃焼なのだ。

おまけにいつもは必ず視界の端ギリギリのところをうろちよろし
ているはずの、
筆頭下僕の姿が見えなかった。これは実に面白くない。

いついかなる時も、主人の華々しい登場を恭しく迎えるのが
筆頭下僕の仕事ではなかったか？

朝っぱらからコケシ顔だの鳥頭だの、
牛五郎だののむさ苦しい面を眺めてみてもつまらない。
あの、泣き笑いのような不思議な表情・・・あれが良い。
久々にあれが見られると思ってわざわざやる気満々で現場に乗り込
んでやったのだ。

従順な犬つころのように常にご主人様の動向を窺うようなあの視線。

そのくせ構ってやると途端に泣きそうに歪むあの表情。
ところが悪人を成敗する時にはあの顔が尊敬や憧憬といった熱い眼差しを注ぐのが、

これまた実に良いのだ。

それが榎木津を実に気持ちよくさせる。

なのに今朝はその眼差しが無かった。
それだけでもうどうにもつまらない。

急激にやる気の無くなった榎木津は非常に面倒だったので、
悪人たちを残らず綺麗に折りたたむとその足で京極堂に向かった。

何だかちよつとむかついたので、事務所には帰りたくなかったのだ。

まっすぐ事務所に帰れば件の下僕が、
いつものように何事もなかった様子で
「お帰りなさい」と出迎えるような気がしたからだ。
そんなこと、想像するだけでも癢だ。

何故来なかった、とは聞けない。

それは、自ら負けを認めるようなものと榎木津は思った。

（僕が負ける？あの下僕に？・・・はっ、有り得ないね！）

一体何に負けるといつのか。

いつでも思うままに行動してしまう榎木津は

己の感情を整理して考えるということをしたためしがないので、何故そこで“負ける”という発想になるのか理解していなかった。

彼自身は自覚していないが、とにかくそれは彼にとって下僕に弱みを見せる以外の何物でもなかった。

だからもやもやとした気持ちを抱えたまま、とりあえず通い慣れた中野までやって来たのだ。それなのに……。

（何でココにいるんだ。よりもよって！）

そこには榎木津にとって、更に面白くない現実が待ち受けていたのである。

「榎さん……あなたの気持ちはわからないでもないがね、あの男にはハッキリと口にして言ってやらないと通じないよ」

「何を言っているのかわからないぞ、馬鹿本屋」

僕にわかる言葉で話せ、と榎木津は益々機嫌を損ねたように唇を尖らせた。

「ご冗談を。僕の口からそんなこと言えるもんか。あんなら二人の問題だろうに」

「……………」

「まさか榎さん……いや、……………うん……？」

中禅寺は、本気で何もわかってなさそうな榎木津の表情に、思わず唸り声をあげて口を噤んでしまった。

（まさかそんな・・・そんなことがありえるのか？）

榎木津は、何かにつけて敏い男である。

特に色恋沙汰については経験も豊富なので、

そういった心の機微にも精通しているはずだ。しかし・・・。

（気付いていない・・・のか？）

「何だはつきりしない奴だな。言いたいことがあるならはつきり言え！」

「いや・・・。あんた、そもそもウチに何しに来たんだ？」

「何しに・・・？遊びに来てやったに決まってるだろうが」

榎木津はそんな質問は心外だとばかりに眉を跳ね上げる。

「・・・彼を引き取りに来たんじゃあないのか？」

中禅寺がわずかに首を傾げながら確認すると、

榎木津は「馬つつつ鹿か？！」と心底馬鹿にしきったような顔で即座に反論した。

「なぐんでこの僕が下僕を迎えに来なきゃいけないんだ！

下僕は黙ってても主人に付き従うものだ。

わざわざこちらから出迎える必要などない！」

相変わらず偉そうな態度でふんぞり返る榎木津だが、いつもの通りその姿は様になっている。

「大体、人んちで熱出して倒れるなんて、下僕の風上にも置けないヤツだ！

そんな面白い事件を起こすなら、普通は主人の目の前で行うものだ！
・・・お前ばかりズルイぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・話が元に戻ってしまった。

どうやら榎木津は、熱を出して倒れてしまった益田を

甲斐甲斐しく世話した中禅寺のことが気に入らないらしいのだが、そんなことで駄々をこねられても彼も困るのだ。

（やっぱり・・・気付いてないのか？榎木津ともあろう男が・・・？）

嘘だろう・・・？と思う反面、

いや案外自分のことは見えないものなのかもしれないと思い直して、中禅寺はそのことについてはとりあえず口を噤むことにした。

「だからといってあのまま放っておくわけにもいかないでしょう？あんたがどう思っているかは知らないが、僕はそこまで非情な男じゃないよ」

この話はもうおしまいだとばかりに、

中禅寺は脇によけていた読みかけの本を手にとって本格的に読書の

体勢に入った。

むゝ・・・と、榎木津の眉間に深い皺が刻まれる。

「だからって、お前が手ずからご飯食べさせてやることもないじゃないか・・・」

「・・・」

炬燵に顎を乗せて恨みがましい目を向けてくる榎木津に、中禅寺は溜め息と共に強い脱力感を感じた。

「・・・視たのか」

「・・・視た」

「・・・」

「・・・」

二人の間に嫌な空気が流れる。

確かに、中禅寺は手ずから昼食を食べさせた。それは益田の具合が思ったより非常に悪く、一人で食事も出来そうになかったからだ。

千鶴子は留守だし、関口は帰ってしまったし、
・・・だとすると中禅寺が自ら食べさせてやるしかないじゃないか。

しかも中禅寺の手料理だ。

病人食なんて千鶴子が用意して出かけているはずもなく、普通の食事が喉を通るような状態じゃない。

ここまで面倒をかけさせられたというのに、
文句を言われる筋合いは無いような気がする。

（そりゃあ、ちょっと得体の知れないモノが出来上がってしまった
が・・・）

しかも『どうせ熱で朦朧としてて、味なんてわかりやしないんだ
から』

とそのまま無理やり食べさせてしまったが。

それだつて本人からの抗議ならともかく、
目の前の男に文句を言われる筋合いではないと思う。

結局、榎木津が気に入らないのはどうやら彼がその目で目撃して
しまった、

中禅寺の記憶の中の出来事であるらしい。

高熱で朦朧としている益田を抱き起こし、
その体を支えてやりながら食事を食べさせてやった。

彼は中禅寺家にいつものように遊びに来て、
何気なくこの家の主の顔を見た時に、ソレを“視て”しまったらしいのだ。

（・・・まったく。なんて面倒な男なんだ）

その特異な体質についてはそれなりに理解している。
他人に迷惑しかかけない榎木津の性格についても
今更どうにかしようなどとは思わない。

しかし、中禅寺はここにきてようやく悟ってしまったのだ。

（本気で丸つきり完全に間違はなく、・・・榎木津は気付いていない・・・）

益田の気持ちにも、・・・自分の本当の気持ちにも。

妬いているのだ、榎木津は。

しかも当人はそのことに露ほども気付いていない。

中禅寺はもの凄く不機嫌な顔になるのを抑えきれないまま、

「とつととあんたの下僕を連れて帰ってくれないか、榎さん？」
と視線も合わせずに言い捨てた。

「お前に言われなくてもそうするさ」

珍しく齒切れの悪い調子でぶつぶつと呟きながら立ち上がると、
榎木津は襖を開けて奥の間へと消える。

まだ何か言いたそうな素振りではあったが、
中禅寺はそれを全身から発する気配だけで拒絶した。

（あの幫間が色恋沙汰には鈍い男だというのは予めわかっていたんだが、

まさか榎木津までとはねえ・・・）

これはおそらく、

人間観察の鋭い関口ですら予想しえなかった展開ではなかるうか？

中禅寺は榎木津が開けっ放しのまま出て行った襖の方を、
じつとりとした視線で見つめる。

その心中には、たったひとつの思いだけがあった。

（これから面倒事が増える・・・）

それはもう、確実に……。

これから先のことを思いやると中禅寺は一気に疲労を覚え、諦めにも似た諦観の眼差しになるのであった。

>>完<<

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

あとがき

タイトルは、榎さんに対する京極の心中でした。

「先に惚れた方が負け」を無自覚なまま自覚してる榎さんです。

京極は何だかんだ言いながら滅茶苦茶面倒見の良い男です。

そして料理は壊滅的な腕前（笑）

今回一番の被害者は榎さんに折りたたまれた悪人たちではなく、面倒ごとに巻き込まれそうな予感ありまくりの京極でもなく、

「得体の知れないモノを無理やり食べさせられた益田君」でした。

嘘っ?! (後書き)

他にも二次小説、同人系イラストあります。

「ワンピース」「蟲師」「京極夏彦」

気になる方はPCサイトへお越し下さい。

<http://kdokusyo.hp.infoseek.co.jp/>

榎木津という災厄（前書き）

短編連作（全45話の予定）第4話目。
> 榎木津／和寅／益田 <

榎木津という災厄

「ほら、あゝんしロッ!」

「は……い?」

益田が目を覚ました時、榎木津は思いのほか上機嫌だった。

益田自身には全く記憶が無いのだが、寅吉が語ってくれた話によると、

どうやら益田は京極堂で高熱を出して倒れたらしい。

その際中禅寺には随分迷惑をかけたらしいのだが、
どうにもその辺の記憶がはっきりしなくて今ひとつ実感が湧かない。
とりあえず病状が回復したら、一言お礼を言わなきゃまずいだろ
うな、と……思う。

で、朝から例の探偵勝負に出かけていた榎木津が、
何故か上機嫌のまま意識の覚束ない状態の益田を連れて帰ってきた
らしい。

事務所に姿を現した時には信じられないことに、
お……お姫様抱っこ姿だったそうだ……。

(な……何がどうなってそうだったんだ……?)

寅吉から衝撃の事実を聞かされ、益田は少なからず狼狽した。

あの榎木津が、何の面白みもないのに下僕のために尽力するなど考えられない。

何か裏があるとは思えない。

しかも、よりもよって“お姫様抱っこ”とは・・・！

たかが人の形をした大きな荷物、もつと他にいくらでも運搬方法はあるだろうに！

たまたま実家から乗ってきていたハイヤーを使って戻って来たらしいのだが、

そうでなければ普通に電車で帰ってきたのかと思うと益田は発熱のせいでない冷や汗が出そうになる。

衆人の目を全く気にしない榎木津のおかげで、危うくおっそろしく恥をかくところだった。

・・・それにしても、榎木津はどうしてこんなに機嫌が良いのだろう？

それに、この状況は一体・・・？

「こらマスカマオロカ！口を開けロツ！」

“ロツ”のところは巻き舌で、榎木津は木匙に掬ったお粥を益田の口元に差し出す。

ほとんど条件反射で命じられるままにかぱっと口を開けた益田は、乱暴に突っ込まれた匙に目を白黒させながら、なんとか粥を飲み下した。

ここは、薔薇十字探偵社唯一の和室、和寅の寝室である。

気がついた時、益田はここに寝かされていた。

目を覚ました時には傍に寅吉がいて、濡れタオルで額の汗をふき取ってくれているところだった。

『……………和……………寅さん？』

『……………ああ、起きたのか。具合はどうだね？』

『……………はあ。……………よくわかりませんが、

……………スッキリ爽快……………という感じでは……………ない……………です、ね』

目が覚めたばかりで現状もよく把握できていない様子の益田は、ぼんやりと視線をさ迷わせたまま何も考えずに思ったままのことを口にした。

『そりやそうだろう。まだ随分熱もあるようだし、体だって辛いはずだ。

……………他に頭が痛いとか腹が痛いとか、そういう症状は無いかね？』

『さあ……………特に、は……………う、うほ……………』

急に聞かれてもどこが痛いかなんてよくわからない。

益田はとりあえず起き上がろうとして床についた肘に体重をかけた途端、

激しく身を振って咳き込んだ。

『ま、益田くん！』

寅吉が慌てたように体を支えてくれて、咳き込む益田の背中を抱きかかえるようにして擦った。

『げほっごほっ！・・・す、すみま・・・っせ・・・』

ぜいぜいと肩を上下させながら苦しそくに胸を押さえて息も絶え絶えに謝る益田に、

寅吉は『無理をしちやいかん。君は今肺炎を起こしてるんだぞ。

楽な姿勢で安静にしてなくちゃいかんよ』と諫めるように語り掛けた。

（は、肺炎・・・？）

ぼんやりとする頭の中でその言葉を繰り返し、その意味を理解した途端益田は冷水でも浴びせられたように背筋がゾツと凍りついた。

ついでに体の深部から湧き上がる悪寒を覚えて身震いする。

肺炎といえば小さい頃、お隣りに住んでいたおばあちゃんは肺炎を患って三日後に死亡した。

子供の頃仲の良かった幼馴染は同じく肺炎に罹って一ヶ月間高熱に苦しめられたあげく、結局亡くなってしまった。

医学的な統計から見ても、

決して楽観視できるほど死亡率の低くない病気なのである。

・・・死ぬかもしれない、と思うと急に心細くなって、益田はほとんど無意識のうちに、頑是無い子供のように寅吉の腕にしっかりとしがみ付いた。

（いたた・・・っ！）

一方、いきなりもの凄い力でしがみ付かれた寅吉の方は、そんな益田の幼子のような頼りない姿に思わずドキッと心臓を弾ませて息を飲む。

（かつ・・・可愛・・・っ？！いやいやいや！

今のは間違い！訂正訂正！可哀想だな、とそう感じたただけだ！うん。相手は大人で、男で、しょ、所詮は益田君だしっ！）

内心大恐慌を来たしている寅吉の心情など窺い知るよしもなく、益田は呼吸が苦しいのか目元を潤ませて、窺うように寅吉を見上げてくる。

熱のせいか頬は思春期の女学生のように紅潮し、寝間着からちらりと覗く鎖骨が妙に扇情的で、寅吉は思わずゴクリと喉を鳴らした。

『はっ、肺炎と言っても症状はそれほど深刻でないし、さ、さ、さっき注射打ってもらったから大丈夫さ』

たつぷりと水分を含んで潤んだ瞳が縋るように見上げてくる。目に毒なのはわかっていいるが視線を逸らすこともできず、声すら上ずってしまった。

『注射・・・？』

『・・・そうだよ。夕刻にお医者に来てもらってぶつとい注射を打ってもらったじゃあないか。覚えてないのかね？』

君は注射が嫌だと散々ごねまくったあげく力任せに暴れて大変だったんだぞ。

私と先生とで上から押さえつけてやっと注射してもらったんだ、

と寅吉はそこでようやく余裕が出てきたのか本来の落ち着きを取り戻し、

ちよつと意地悪げにニヤリと笑ってみせた。

『注射が恐いだなんて、君もまだまだ子供だな』

『・・・っ！う・・・お、覚えて・・・ない、です』

益田はただでさえ赤い顔を更に真っ赤にして俯いてしまった。覚えてはいないが、・・・心当たりなら充分過ぎるほどある。

真実、注射は死ぬほど嫌いなのだ。

・・・恥ずかしながら、今の話は本当の話だろう。

『じゃあ、先生が君を迎えに行つた時のことは覚えてるかい？』

寅吉の質問に、益田はふるふると力なく首を振ることで否定の意を表す。

『覚えてないです。なんにも。』

今朝、京極堂さんの所に行つたことしか・・・』

じゃあ、わかっていることを教えてやろう、

と寅吉は先ほどまできつく掴まれていた腕をそつと外させながら、益田に再び横になるように勧めた。

そして彼ら探偵と探偵助手が、

探偵事務所に揃つて姿を見せるまでの経緯を簡単に語つて聞かせたのである。

大して長くもない話を語り終えた後、寅吉は部屋を出て行つた。

『何か食べるものを・・・』と台所へ益田のための食事を作りに行ったのである。

しばらくの間一人にされて頭を抱えたまま悶々としていた益田だが、

いつの間にかうとうとまどろんでいたらしい。

少しの間の空白の後、次に騒々しく姿を現したのは予想に反して寅吉ではなかった。

『わはははっ！やっとお目覚めか、ナキヤマ！』

当然のごとく、派手に登場したのは榎木津探偵、その人である。

（それで一体何が起こってるんだ・・・？）

夢の世界に突入しようとしていたところを騒々しくたたき起こされ、

益田は何が何だかわからなかった。

何故か榎木津は手にお粥の器を載せた盆を持っており、ドカドカと和室に踏み込むなり益田の隣りへと歩み寄った。

その唐突な登場に呼応するように、益田は布団を跳ね上げて飛び起きる。

榎木津は何故か非常に上機嫌な様子で、にっこりと満面の笑みを浮かべると

『餌付けの時間だゾッ！』と高らかに宣言した。

そして、・・・現在に至るのである。

「こらマスカマ！次だ次！」

ほら、あゝん！と言いながら差し出される匙に、正直強い戸惑いを覚える。

（こ、この体勢は一体・・・？いや、そもそもこの人は何をしたいんだ・・・？）

恐ろしいことに、身を起こした益田の体を背後から包み込むように榎木津が支えている。

そしてまるで抱きしめるような格好で後ろから手を回し、器に入ったお粥を匙で口元まで運んでいるのだ、・・・あの傍若無人な榎木津が！

益田なんかはもう恐れ多くて、全身にぐっしりと冷や汗を浮かべてしまう。

「く・ち・を・あ・け・ロツ！」

「は、は・・・い」

もう、命じられるままに従うしかない。

どんな理不尽な扱いであろうと、ご主人様に逆らうなんて愚行は彼には考えられない。

嘘みたいに機嫌の良い榎木津にびくびくと怯えながらも、

益田は素直に口を開けた。すかさずお粥が口の中に放り込まれる。

むぐむぐと大人しく租借していると、

「よしよし、イイコだぞ」とまるで愛玩動物にするみたいに頭を撫でられてしまった。

（こ、恐い・・・あとでどんな仕打ちを受けるのか・・・でも・・・）

まだ起こってもいないことを今から心配しても仕方がない。
元々榎木津の行動には一貫性が無いし、とにかく彼は気まぐれだ。

今回はたまたま自ら下僕の面倒を見てやる気になったというだけだろう。

それならば、この状況を受け入れるしか手はない。

（あとでお叱りを受けるにしたってどうせいつものことだし・・・）

榎木津の突飛な行動はいつも、

嵐のようにやってきて散々回りを翻弄したあげくに去っていく。

それとばつちりを受けて後始末をするのは下僕の仕事だ。

嵐到来中に下僕が出来ることといったら、できるだけ被害が自分に及ばないよう

大人しく息をひそめて動向を見守ることぐらいである。

そして嵐が全てを薙ぎ倒し通り過ぎるのを待つのみなのだ。

下僕としての生活がすっかり板についてしまっている益田はある意味開き直りつつも、何だかとはほな気分で頂垂れながら、ありがたい神の施しを一身に受けるのであった。

>> 完 <<

榎木津という災厄（後書き）

他にも二次小説、同人系イラストあります。

「ワンピース」「蟲師」「京極夏彦」

気になる方はPCサイトへお越し下さい。

<http://kdokusyo.hp.infoseek.co.jp/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8949b/>

■こんな二人■

2010年10月9日03時45分発行